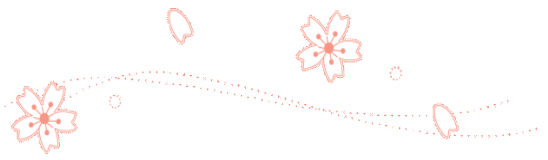


さくらだより [4号]



2010年12月発行

今年の生理・医学ノーベル賞にロバート・エドワード博士が授与されました。この方は医師ではありません。発生学を専門とする研究者です。このエドワード博士とステプターという産婦人科の医師とで、1978年世界で最初の体外受精に成功しました。すでに30年以上の年月が経ちました。この間、世界中で体外受精による出生児は500万人に達しています。日本でも50人に1人は体外受精で生まれています。このように体外受精が身近な治療に定着し社会的貢献に照らし合わせて受賞が決まったものと思います。残念ながらステプター医師の方はすでに亡くなっているので共同受賞の栄に浴することはできませんでした。この体外受精が広く行われるようになった結果、いくつもの大切な生理現象が明らかになっています。月経がいくら順調でも37歳頃を境に急激に卵巣機能が低下してきます。40歳を超すと受精能力はさらに低下します。ところが、食生活の改善などで、生活環境を見直すことでこの低下境界年齢を延ばすのではないかということが分かりつつあります。卵巣内に存在する卵子の素が一定数であるだけに、何とか質の良い卵子を生産できるような身体にしたいものです。バランスの良い健康な食生活をしているか考えるところから始めてみましょう。

荒木康久(不妊学級担当)

今年も余すところあと20日余りとなりました。職員一丸となり皆様の幸福のために尽力して参りましたが、結果ご期待にそえなかったことも多々ありました。この一年を振り返り、反省すべきは反省し、よりよい医療を皆様に提供できるよう又頑張るつもりであります。一年間有難うございました。

吉田智子(院長)

